

# 多剤併用解消と栄養改善へ ホームと薬局がチームに

社長対談  
アライブメディア  
セントラル薬局G



▲セントラル薬局グループ田中宏和社長(左)とアライブメディア安田雄太社長(右)

都庁中心に介護付有料老人ホームを運営するアライブメディア(東京都渋谷区)と訪問薬剤管理指導に力を入れるセントラル薬局グループ(さいたま市)は、協働でホームの入居者のポリファーマシー(多剤併用有害事象)と栄養状態改善に取り組んでいる。10月14日に開催された「介護付きホーム研究サミット2021オンライン」第9回介護付きホーム事例発表全国大会)では、アライブメディア(東京都世田谷区)での取り組みがクランプリを受賞。アライブメディアの安田雄太社長とセントラル薬局グループの田中宏和社長に話を聞いた。

「2社がパートナーシップを結んだ背景は。安田 当社では3年ほど前、多様化する入居者やご家族のニーズに応えるべく、「入居者の夢を叶える」ことに尽力する方向性を打ち出しました。この方針を「アライブアップ」と銘打ち、旅行や在宅復帰も叶うよう、自立支援・認知症ケアの独自のメソッドに取り組んでいます。「運動」「睡眠」「減薬」「水分」「食事」「排泄」にアプローチする中で、「減薬」と「食事」により力を入れるべく、以前から交流のあった田中社長との協働に至りました。田中 ポリファーマシー、低栄養解消には運動や認知症ケアなど一体的な自立支援なしに成り立ちません。アライブメディアの職員は入居者の自立支援、生きがいづくりの熱量が非常に高い。共に「アライブアップ」の目的を果たすべく、タッグを組みました。具体的な取り組みは、

田中 アライブメディアの介護職・看護師、セントラル薬局グループの薬剤師・管理栄養士など多職種によるNSTを結成しました。入居者の情報共有をしながら身体面・栄養面・精神面の評価や服薬指導を行い、訪問診療に同行。医師に処方や食事内容の見直しの提案を行っています。ポイント。田中 キーマンは医師です。

平均2.71剤減薬  
薬剤師や看護師が訪問診療に同行して医師の処方傾向を知り、処方や食事内容の変更を提案できるように、医師と信頼関係を築いていきます。また、「アライブアップ」のように入居者が夢を持ち、職員が熱量を持って取り組むことが大前提となります。特に薬剤師は、「その理念」と薬剤師の専門家としての「ロジック」を併せて医師に提案することが重要です。当社では薬剤師の質を高めるため、薬剤師の学術研修部を設け、ポリファーマシーや栄養面などの教育体制を構築しています。安田 法人本部では、介護職や看護師、ケアネッシャー、ホーム長など計6人の現場経験者で構成された「タスクフォース」チームがあります。チームが全施設を回り、現場に入り込むことで職員をサポートします。そこにセントラル薬局グループの薬剤師・管理栄養士も加わります。このチームを含め、全職員が同じ方向を向いてゴールを目指すこと

が必要で。田中 栄養面、口腔面、身体面のアプローチ方法は。田中 食事は、セントラル薬局グループの給食会社が担っています。調理師がメニューを考案し、管理栄養士と情報を共有して入居者一人ひとりに合わせた栄養価やカロリー、形態の食事を提供することに力をかけています。安田 栄養改善のため、訪問歯科医とも連携し嚥下評価や口腔ケアを行っています。また、日中の活動量を増やせる

の取り組みでは、約半年で平均薬剤数を7.46から4.75に減らすことができました。85%の人が体重増加または維持、アルブミン値も上昇しています。例えば、食事摂取量が大幅に低下していた102歳の女性は、食欲低下の副作用がある薬の中止などにより、食事が量が増加。体力も回復し、入居時から夢であった家族旅行に行くことができました。これこそが我々が存在する価値だと思います。今後の方向性は。安田 通り一遍の介護では、入居者の夢は叶えられませんが、介護職はクリエイティブです。人間力を高める研修を通じて、介護職のベネフィットに力を入れていきます。また先日、新たに法人のV.M.V (Vision Mission Value) を打ち出

## 処方内容変更も

よう、介護職の人員を1:5対1と手厚く配置し、動く歩行機会を担保しています。取組みの効果は。安田 アライブ世田谷代田

「施設の手配、手配したい」と田中社長

▲「施設の手配、手配したい」と田中社長

## 処方内容変更も

「施設の手配、手配したい」と田中社長

▲「施設の手配、手配したい」と田中社長

▲「施設の手配、手配したい」と田中社長